出会い（16）

修道生活きのうきょう

啐啄同時（ソッタクドウジ）

――ローマの人とパリーの人と東京の人――

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

「啐啄同時」。わたしの好きな禅語のひとつ。師弟が肝胆相照らす深い出会いを意味する伝統的用語。啐（ソツ）は鶏卵が孵化しようとする時、小雛が卵の殻を内側からつつくこと、啄（タク）は母鶏がそれと同時に外からつつくことで、殻がやぶれ雛がでてくることをいう。「肝胆相照らす」という諺以上に、何か深いものを感じさせてくれます。

1. ローマの人

わたしにとっては、今から40年余も前のことですが、まるで昨日のことのように思われる懐かしい人との出会いをその禅語が思い出させてくれます。細かいことはさておいて、かいつまんで書くことにします。

当時（1959年夏）、ローマでの勉学を終わって帰国の準備に入ろうとしていたある朝、神学院の近くにある美しい緑の大樹に囲まれた公園に友達と出かけた時のことです。木陰のベンチに腰掛けて二人で話をしていましたら、高齢の紳士が近寄りながら話しかけてこられました。色の違う二人でしたので興味をもたれたのでしょう。黒い顔のインド人と黄色人種の日本人でしたから。大学教授かと思われる品のよい方で、丁寧な態度で話しかけてこられました。「あなた方のお国には、どんな宗教がありますか？」。二人とも、同じように、「大小沢山の宗教が昔からあります」と答えると、少し暗い面持ちで言葉を継がれた。「わたしが間違っているかもしれませんが、あなた方のお考えをきかせてくだされば有り難い。宗教というものは、どこの国にもあり、それぞれの文化によってそれぞれ異なる宗教が生み出されてきました。それなのに、自分たちの宗教を他の宗教のひとびとに押しつける宣教は傲慢だと思います。それに、カトリックは、何でも、“神秘、神秘”といって、何を言ってるのか、さっぱり分からない」。まだ神父になりたてのわたしには、パンチのきいた問いかけでした。それも、目の前には、堂々たる聖ペトロ大聖堂が天に聳えている。その頃は、ピオ十二世教皇帰天後まもなくで、後任のヨハネ二十三世教皇がその日もそこにおられたと思います。選るにも選んで、そのカトリック大本山バチカンのすぐそばで、二千年の伝統をもつキリスト教信仰に育てられてきた教養も深そうなひとりのローマの人の疑問はわたしにとっての貴重な「啐啄同時」でした。というのも、宗教過剰と宗教の空白が共存する極めて複雑な文化に特色づけられた祖国日本への帰国直前に神から与えられた重大な課題のように思われました。

「宗教の多様性」とか、「宗教対話」という最も大きな現代的課題が、半世紀前、すでにローマの街の一角で、ひとりの信徒のまじめな疑問としてとりあげられたことにも驚きます。事実、その問題が公に論じられた第二バチカン公会議の終了とともに、「宗教対話評議会」がバチカンの膝元に開設され、以来、世界的規模で活動が始められてきました。それにしても、聖霊の隠れた働きの豊かさと速さと、それを受け取る人間の鈍さと稚拙との対照が際立つのは、いつ、どこでも変わらないようです。

2. パリーの人

以上のことがあってからローマを離れて二か月後には、フランス船でマルセーユから日本に向かって出港、一か月の長い船旅にでました。今では考えられない豪華な旅のようですが、甲板（デッキ）に出て、毎日、果てしなく広い海原を眺めるだけで、単調な日々でした。しかし、修道院で身につけた「鞭打ちの苦行」と2時間の「黙想」だけは欠かすことはありませんでした。旅の仲間が出会う賑やかな時間は、主に食事の時で、特に、昼食後のコーヒータイムの折でした。わたしたちは、会の規則どおりいつも修道服を着ていたので、ディスカッションを好むフランス人と話していた時、また、軽い宗教論になりました。「宗教というものは誰にも必要だ。しかし、この宗教でなければならないという理由はない」という、フランス人の持論。先のローマの人の考えとは、少し角度が違いますが、基本的には同じ。つまり、両者とも文化の多様性を重んずる「宗教平等論」の立場で、当時のカトリックの主流から逸れる考えでし

初ミサ

た。幾分異なるニューアンスがあるといえば、フランス人はフランス人らしい、「わたしはわたし」という、よい意味での「個の主張の正当性」がそこに見られました。それに対し、ローマの人の場合には、文化と宗教との関係のなかで個々の宗教の価値を尊重するという姿勢が見えました。そこには、イタリア人らしいソフトなヒューマニズムのようなものが感じとられました。その意味でも、二つの異なるヨーロッパ人の顔を見るようで興味深く思いました。いずれにしても、街角で出会った二人のだされた宗教についての難問は、すべてがグローバリゼイションの発想が流行する現代思潮の先駆けのようでした。そこには、ただ、カトリック教会だけでなく、すべての宗教に問われる半永久的命題が暗示されていました。その意味で、石油業という、神学には縁遠い仕事をしているフランス人の主張も、わたしにとって、もうひとつの「　啄同時」となりました。

3. 東京の人

一か月の船旅を無事に終えて、横浜港についたのは、同じ年の10月12日。その10年前、日本の男子カルメル会を創立したイタリア人宣教師数名が港まで迎えにきてくれました。すぐに、東京世田谷にある修道院に入り、日本での生活が始まりました。ところで、3日後の10月15日、調布に移って新築した女子カルメル会東京修道院の祝別式があるということで、院長とともにタクシーに乗って出かけました。

白いローマンカラーを見て、「あんたたちはカトリックの神父さんですか」と気さくに話しかけてこられたので、イタリア人の院長はうれしくなって「あなたはカトリックですか？」と尋ねた。すると、運転手さんは、「ぼく？　ぼくかね？　ぼく無宗教」と答えながら、「だってネ。宗教なんか、たっくさんあり過ぎて、どこに入ったらいいんか分からないじゃないですか？　誰かが、そんな宗教をみんな集めて一つにするなら、僕は喜んで入ります？」と、未来宗教の夢を示してくれたタクシーさん。なるほど、さすが、日本人ならずばの名案、あるいは迷案か？！　なんとも、微笑ましい日本的発想！しかし、それから間もなく、日本人論の名著『日本の思想』（丸山真男著1961年）が発刊され、わたしも興味ふかく読み、まさに我が意を得た思いでした。著者は、そこでは、日本人の精神性に逆らうものとして二つをあげています。キリスト教とマルクス主義の二つです。特に、「キリスト教はヨーロッパの最も頑強な公式である」と断言しています。すでに、共産主義が崩壊したいまでは、キリスト教だけが敵対者ということになります。さらにそのなかでも、頑強なのは、カトリック教会といえましょう。その丸山理論は、まさに、いまなお、日本において発展しないキリスト教の行き詰まりの根本原因を示すものといえましょう。タクシーさんの夢を妨げるものは、程度は違いこそあれ、どの宗教にも共通する自画自賛の傲慢と自己満足です。しかし、神の思いと力は、人間のそれを無限に越えるものであることは確かなことです。その愛によって、その愛のうちに一致する人類共同体の実現は、神の最大の栄光であることも確かです。信仰とは、自宗を守る鎧ではありません。兄弟のために自分の命を捨てるまでの愛の決断です。（ヨハネ15，13）

表紙の写真

「ノーマンズランド」を歩いて

バングラデシュ，1992年

フリーランスの写真家として活動する者として、あきらかに対照的に異なる現実の間を行き来する私がいる。戦争と平和、飢饉と富、独裁国と民主主義国、こうした極端に違う文化や社会情勢の間で活動している。たえず私は、私自身の家と何処か知らない「他の場所」にある、確実に存在するものの間を動き回っている。

目立った特徴と性質を持つ場所、ソマリア、ウガンダ、パキスタン、アフガニスタン、そしてバングラデシュなどは私が旅をした場所だ。それぞれに地名もあるが、これらの場所は、より大きなどこかの場所「ノーマンズランド」に属しているように私には思える。これらの場所への旅は、探求心と好奇心にあふれる、未知の世界への長い旅の一部である。見慣れていても良く知らない、そして、ある部分は知っているがある部分は神秘的な世界だ。

写真家として私は「ノーマンズランド」を歩き、私が当然のことながら属さない場所からレポートを続けている。よく理解されないかもしれないが、私は独自の方法でこれらの場所の写真を撮ることによって、好奇心を抱き、生命の不思議さを感じ取り、そして存在することに関わって生きてきた私の境遇というものを認識しようとしている。

クリス・スティール＝パーキンス　1999年